古文入門期における教材の言語活動
―感染症対策に考慮したＧＷ―

国語科　畠　山　　俊

1. はじめに

2019 年度から 2020 年度にかけて COVID-19 により，学校教育は多大な影響を被った。休校措置を経ての学校再開後も教育活動は大幅に制限された。感染症下で行ったグループワーク（以下, ＧＷ）の経験を残しておくことは今後にも有意義であると考え，取り組みを紹介することにした。なお，本校では段階的にではあったが，最終的にペアワーク（ただし，できるだけ向き合わずに行い，机は離したまま）は行ってよいこととなったが，2021 年度当初もその申し合わせは継続されている。ペア以上の人数のＧＷは原則として認められていない。そのため，個人で行う学習活動とペアで行う学習活動とが教材学習後の「言語活動」として考えられる。その２種を軸に教材学習後の言語活動を組み立ててみた。個人で考えるものと，ペアの場合は個人で考えたものを交換して作成するものが主なパターンである。感染の可能性をなるべく小さくするための措置である。このように個人が中心となって活動を行う場合も何らかの形でそれぞれの結果が個人に還元されるように考えてある。

2. 取り組みの概要とねらい

2.1.　取り組みの概要

本校では１年次の「国語総合」の教科書として『国語総合　古典編』東京書籍（平成 28 年 3 月 10 日検定済）を使用している。入門期と考えられる古文の第一単元，第二単元は次のような構成になっている。

第一単元「古文入門」　○検非違使忠明（『今昔物語集』）
　　○絵仏師良秀（『宇治拾遺物語』）
　　○大江山の歌（『十訓抄』）
　　数寄の楽人（『発心集』）

第二単元「随筆１」徒然草　○「丹波に出雲といふ所あり」
　　○「ある人，弓射ることを習ふに」
　　○「九月二十日のころ」
　　「今日はそのことをなさんと思へど」
　　「一事を必ず成さんと思はば」

時間的にすべての教材を学習する余裕がないので，○を付した教材を選択して取り扱った。2022 年度から高等学校で実施される新学習指導要領では「深い学び」が可能な「言語活動」が重視されることもあり，試行としてぞれぞれの教材でまとめとして，この状況下で許される「言語活動」を設定した。なお，各教材はオンラインの授業で

文法的解説および読解を行っており，対面授業となった際に「言語活動」のみをまとめの意味で行った。他に『徒然草』から「奥山に猫またといふものありて」「花は盛りに」の２教材と第五単元「随筆２」から『枕草子』「五月ばかりなどに山里に歩く」「ありがたきもの」の２教材を入門期（１学期に相当）に位置付け学習した。それぞれの「言語活動」について報告する。

2.2.　取り組みのねらい

「深い学び」によりもたらされる学力をどのように考えればよいのか。その指針として「GPS - Academic」（ベネッセ）を参考にすることとした。本校では第１学年，第２学年で全員に「GPS - Academic」を受験させている。「GPS - Academic」とは「大学での学びや経験ではもちろん，社会で活躍するために重要視される『問題解決力』。この問題解決力の現状を思考力，姿勢・態度，経験の３つの観点で確認するアセスメントです。このアセスメントを受けると，現時点でのスコアと，『大学生活で力をいれるポイント』がわかります。」と説明されている（パンフレットによる）。結果は次の３つの思考力として示される。

「批判的思考力」「創造的思考力」「協働的思考力」

それぞれの「思考力」はベネッセにより次のように定義されている。

- 批判的思考力：必要な情報を取りだし，いろいろな観点から考え，自分の考えを筋道立てて説明するための思考力
- 創造的思考力：情報をつないだり，別の場面に応用したりすることで，問題を見つけ新たな解決策を生み出すための思考力
- 協働的思考力：他者との共通点・違いを理解し，合意を得たり気づきを得たりして人と関わりあうための思考力

そこで，ねらいとしてこれらの力の養成を意識しながら教材学習後のまとめとして「言語活動」を設定することとした。

3.　それぞれの思考力に対応する教材と「言語活動」

3.1.　批判的思考力（主として個人活動）

- 「検非違使忠明」（資料１）　主人公忠明の人物像を読みとり，認められるところ，認められないところを書き出す。
- 「ある人，弓射ることを習ふに」（資料５）　作者の主張を読みとり，それに反論する。
- 「九月二十日ばかりに」（資料６）　登場人物の行いについて，肯定または否定する。

3.2.　批判的思考力・協働的思考力（主としてペアワーク）

- 「絵仏師良秀」（資料２）　主人公良秀の人物像を読みとり，その姿勢を肯定するか，否定するかを書き出す。書き出した後，ペアで交換して，相手に対する反論を書く。
- 「花は盛りに」（資料８）　作者の論に反対する論を教材と読み比べ，どちらかを支

持する。さらに，ペアで交換して，反論を書く。

3.3.　創造的思考力（主として個人活動）

・「大江山の歌」（資料３）　和歌に使われている掛詞をまねして，自分も掛詞を考えてみる。
・「丹波に出雲といふ所あり」（資料４）　各場面における同行者の心情を考え，最後にかけるひとことを考える。
・「奥山に猫またといふものありて」（資料７）　異なる本文を校訂する。
・「五月ばかりなどに山里に歩く」（資料９）　場面設定をまねて，随筆を創作する。
・「ありがたきもの」（資料 10）　自分なりの「ありがたきもの」を選び出す。

さらに，各教材には「言語活動」とは別に「要約」も課すことにした。「要約」を課したのは，これらの古文教材は現代文教材より長さが短く，現代語訳することで要旨も頭に入っていることから，「要約」のトレーニングにふさわしいと考えたからである。それぞれの教材の「要約」は各教材にふさわしい字数を個別に設定した。理由は，教材の内容にも関わることではあるが，どのような「要約」をしてほしいかのメッセージを字数として提示しようと考えたからである。そして，「言語活動」は教材の内容を踏まえつつ，教材を多面的に捉えるように配慮し，３つの力の養成を意識して構想した。「言語活動」としての生徒の活動時間は教材ごとに異なるが，「要約」を含めて 10 分～ 15 分程度とした。授業の前半に簡単に文法事項等の解説をし，さらに読解の確認をした。その後に「要約」を含めた「言語活動」を行い，本校の 45 分単位時間に構成している。なお，これらの「言語活動」については，個別の評価はせず，多様な考え方が分かるような形でまとめのプリントを出した。それぞれの教材の評価は通常の定期考査で行った。

資料１～資料 10 までが実際に作業に用いたプリントである。Ａ４サイズの上段のＡ５版が初めに配布する作業プリントで，下段が授業終了時に配布したまとめのプリントである。回収した作業プリントはまとめを作成した後，生徒に返却した。上段，下段をセットで保存するようにあらかじめ指示した。

4.「言語活動」の実際（時系列）

4.1.　「検非違使忠明」

主人公の「忠明」が清水の舞台から飛び降りるという突拍子もない行動を取る。その行動を含めて主人公の認められる所，認められない所を書き出す。

同じ行動を「勇気」と取るか，「危険」と取るか，評価が分かれる。

個人作業として行った。ただし，時間が許すペアには記述後に交換して，相手の考えを理解し，感想を述べる機会を持った。

4.2. 「絵仏師良秀」

自宅の火事を見て，炎を描く参考にした主人公「良秀」の姿勢を肯定するか，否定するか，自分の意見をまとめる。

ペアで交換して相手の意見に対する反論を書く。

職業を優先するか，家族を優先するか，価値観の相違が現われる。

ペアが同じ意見の場合，違う意見の場合があるが，理由が微妙に異なるので，どちらの場合も相手の意見にどのように反応するかが問われる。

4.3. 「大江山の歌」

和歌の技法である掛詞を学習し，自分なりに創作する。

個人の作業であるが，まとめのプリントを配布する際に掛詞としての二重の意味がうまく使われているものを紹介した。

4.4. 『徒然草』「丹波に出雲といふ所あり」

場面分けとその時の心情を表形式で整理し，書かれていない最後の場面の心情を考える。

上人（ほめた出来事が子どものいたずらだった）に共感的な意見と批判的な意見があった。ペアで交換し，相手の意見に対する感想を記す。感想ではあるが，相手の意見を的確に読み取っていなければ，適切な感想とはならない。

4.5. 『徒然草』「ある人，弓射ることを習ふに」

作者の主張（名人には怠け心が見抜ける）に反論する。

他者（ここでは作者）の考えを理解したうえでそれに対する反対意見を表明する。

個人の作業である。

4.6. 『徒然草』「九月二十日のころ」

登場人物である女性（自然な気遣いがある）の行いを肯定あるいは否定する。

個人で，他者（登場人物）の行動を評価する。

4.7. 『徒然草』「奥山に猫またといふものありて」

異本を校訂する。

句読点，濁点等のない古文の形を学習する。

２種類の本文を比較し，違いを捉え，そのうえで教科書本文と異本との意味の相違を考える。このようなテクストクリティークも求められる力の一種である。

個人で考えた後，ペアでお互いの考えを披露し合い，さらに他の読解の可能性を探らせた。

4.8. 『徒然草』「花は盛りに」

この兼好の考えを批判する『玉勝間』（本居宣長）を読み，兼好と宣長のどちらを支持するか，理由とともに論じる。

ペアで交換し，反対の立場で意見を書く。

立場が対立するふたつの意見を正確に読み取り，自分がどちらの立場に立つかを判断する。それぞれの支持意見に反対するという二重の意味での批判的思考力を求める。

4.9. 『枕草子』「五月ばかりなどに山里に歩く」

「○月ばかりなどに△△に歩く」というコンセプトで短い文章を書く。現代文，古文の指定はしない。型にはめた形での個人での創作活動。

型にはめることで逆にそれぞれの目の付け所が比べられるようになるし，指定はしなくても自ずと古文調で書く生徒が増える。

既習教材の古語を用いるなど学習の成果がうかがわれるものもあった。

4.10. 『枕草子』「ありがたきもの」

私家版「ありがたきもの」を個人作業として考える。

「ありがたし」という古語の意味を定着させることができる。この場合は現代文で答えるものが多かった。前項との比較の意味で興味深い。

資料 11 ～資料 19 までが「作業プリント」返却時に併せて配布したプリントである。これも「作業プリント」「まとめプリント」と合わせて教材の記録として保存を指示した。

5. おわりに

いろいろな制約の中でできる範囲で生徒の活動を促したが，従来とはまた違った意味で学習活動を考えられた。３人や４人のグループの方が活性化する課題ももちろんあろうが，可能な範囲で活動ができたことは成果である。今後，課題の出し方や別の角度から課題を設定できないか等，工夫を重ねていきたい。

今後の課題として気になるのは，やはり評価の問題である。基本的な読解は定期考査に譲るとしても，全面的なオンラインの授業が長期化した場合には考査によらない評価方法が検討されなければならない。これは新学習指導要領の数値によらない評価にも通じるものである。ペアによる意見交換などは意見が論理的に批判され合っているかは読んで判断することができる。しかし，そのような中にもどちらかが優れているためにかみあっている場合とお互いが優れている場合がある。ペアを評価すべきか，個人に還元すべきかは難しい問題である。また，最優秀作や優秀作を選ぶことはできても，細かく順位付けできるかどうかは難しい（そもそも順位などにこだわることはないかもしれないが）。達成度を測るにもどの程度のところに達成と非達成の線を引

くことができるのかは悩ましい。理想的なやり取りや独創的な創作を提示することはできるし，良い例と悪い例を提示することで次の課題への取り組みを向上させる，添削を通して方法論を学ばせるということは可能かもしれない。そのようなことを試行錯誤しながらどのような評価が可能であるか探っていきたい。

資料 1

「検非違使忠明」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を百字以内でまとめなさい。

2　忠明について、認められる所／認められない所を箇条書きにしなさい。

・　・　・

「検非違使忠明」

内容

検非違使忠明は若い頃、京童とけんかした。京童が大勢、刀を抜いて向かってきたため、忠明は蔀を脇に挟んで、前の谷に飛び降りた。すると鳥のように降り立って逃げることができた。忠明は観音様のおかげだと考えた。（百字）

文法

動詞の活用

9種類の動詞の活用の型（○行×活用）

動詞の活用形（未然・連用・終止・連体・已然・命令）

語彙

あまた

資料 2

「絵仏師良秀」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を一五〇字以内でまとめなさい。

2　良秀の姿勢をどのように思うか。肯定／否定の立場で理由を書きなさい。

「絵仏師良秀」

内容

絵仏師良秀の家が火事になり、自分の作品や家族に火が及んだ。しかし、良秀はひとり、道の反対側に避難し、人々のお見舞いにも応えず、炎をうなずきながら見つめていた。そして、長年うまく描けなかった火炎がどのように燃えるかわかったと、心配する人々をあざ笑っていた。その後、良秀の絵は人々に賞賛された。

文法

動詞の活用

9種類の動詞の活用の型（〇行×活用）

動詞の活用形（未然・連用・終止・連体・已然・命令）

形容詞の活用

接続助詞「ば」

語彙

さながら

あさましき

年ごろ

あしーわろしーよろしーよし

資料 3

「大江山の歌」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を一二〇字以内でまとめなさい。

2　掛詞を含んだ短文を作りなさい。可能な人は五七五七七の音数に合わせてみよう。

「大江山の歌」

内容

歌合せで歌を詠むことになった小式部内侍を、定頼中納言がからかったところ、小式部内侍は定頼の袖を押さえて、とっさに歌で答えた。意外なことに定頼は返歌もできず、逃げてしまった。それ以来、小式部内侍は歌人としての名声が世に広まった。

文法

動詞の活用

9種類の動詞の活用の型（〇行×活用）

動詞の活用形（未然・連用・終止・連体・已然・命令）

形容詞の活用

形容動詞の活用

和歌―掛詞

語彙

詠む

心もとなし

（読み）　局　　御簾　　直衣

資料 4

『徒然草』「丹波に出雲といふ所あり」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を百字以内でまとめなさい。

2　本文を三つの場面に分け、それぞれにおける人々の心情をまとめなさい。ただし、三番目の場面の心情は人々から上人への「ひとこと」を考えて書き入れなさい。

場　面	同行した人々の心情

『徒然草』「丹波に出雲といふ所あり」

内容

聖海上人が人々を誘って丹波出雲の神社に参詣した。そこの獅子、狛犬が後ろ向きに立っているのに感激し、人々にもそれを素晴らしいことと言ったが、実は子どものいたずらであり、上人の感激は無駄になってしまった。（百字）

文法

助動詞（意味・接続）

完了「つ」「ぬ」「たり」「り」

断定・存在「なり」

過去「けり」

打消「ず」

助詞　終助詞「ばや」（願望）

語彙

めでたし

ゆゆし

いみじ

むげなり

つと

ゆかしがる

おとなし

いたづらなり

資料 5

『徒然草』「ある人、弓射ることを習ふに」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を百字以内でまとめなさい。

2　作者の主張することに対して、反論しなさい。

『徒然草』「ある人、弓射ることを習ふに」

内容

ある人が弓射ることを習う際に、二本の矢を手にしたら、初めの矢に集中できないからだめだと師匠に言われた。師匠の前で一本を粗末にすることは自分では分からなくても師匠には分かるのである。仏道修行も同様である。

文法

助動詞（意味・接続）

推量「む（ん）」「べし」

助詞　係助詞「や」（疑問・反語）

語彙

なかれ（禁止）

おろかなり

ねんごろなり

なんぞ（疑問・反語）

はなはだ

資料 6

『徒然草』「九月二十日のころ」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を百二十字以内でまとめなさい。

2　ここに登場する女性の行いを肯定／否定しなさい。

『徒然草』「九月二十日のころ」

内容

ある人に誘われて出掛けた際に立ち寄った家があった。ほのかな香りを始め、心惹かれる風情があり、辞去した後も隠れ見ていたところ、その家の主人は客人を見送る感じでたたずんでいた。日ごろから心がけているのであろう。ほどなく亡くなったと聞いた。

文法

助動詞（意味・接続）

受身「る・らる」

使役「す・さす」

反実仮想「まし」

語彙

歩く

けはひ　気色

優なり

やがて

口惜し

資料 7

『徒然草』「奥山に猫またといふものありて」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を百字以内でまとめなさい。

2　この話は別の本では次のようになっている。古文なので、もちろん句読点や濁点はない。切れ目を確認しながら、どこが違うのか、現代語訳にするとどう変わるのか、考えてみよう。

なにあみた仏とかやいひて連歌しける法師の行願寺のへんにありけるかききてひとりありかむ身は心すへきことにこそと思けるころしもなる所にて夜ふくるまて連歌してたたひとりかへりけるに

『徒然草』「奥山に猫またといふものありて」

内容

山奥に猫またというものが出ると、連歌を好む法師が聞いて、恐れていたところ、ある晩、ひとりで歩いている時に、猫またに襲われた。やっとのことで家に逃げ帰ったものの、実は飼い犬が主人に飛びついたのであった。

文法

助動詞（意味・接続）

断定「なり」／伝聞推定「なり」

打消「ず」

完了「ぬ」

あなる＝「ある＋なる（伝聞推定）」

語彙

心すべきこと

音に聞く

失す（うす）

稀有なり

資料 8

『徒然草』「花は盛りに」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を四〇字以内でまとめなさい。

2　次の文は本居宣長の『玉勝間』の一節で、兼好に対する批判である。

兼好法師が『徒然草』に、「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。」とか言へるは、いかにぞや。いにしへの歌どもに、花は盛りなる、月は隈なきを見たるよりも、花のもとには風をかこち、月の夜は雲をいとひ、あるは、待ち惜しむ心尽くしを詠めるぞ多くて、心深きも、ことにさる歌に多かるは、皆、花は盛りをのどかに見まほしく、月は隈なからんことを思ふ心の切なるからこそ、さもえあらぬを嘆きたるなれ。いづこの歌にかは、花に風を待ち、月に雲を願ひたるはあらん。さるを、かの法師が言へるごとくなるは、人の心に逆ひたる、後の世のさかしら心の作りみやびにして、まことのみやび心にはあらず。かの法師が言へる言ども、このたぐひ多し。皆、同じことなり。

兼好と宣長のどちらを支持するか、理由を述べなさい。

兼好　　宣長　＊支持するほうに〇を付ける

『徒然草』「花は盛りに」

内容

物事は一番いい時だけを見るのがよいわけではない。その前後にも見所は多い。

文法

「ぬべし」「つべし」「なむ」「てむ」　「ぬ」「つ」の強意の用法

動詞＋に＋過去の助動詞　「に」は完了「ぬ」の連用形

完了「り」　接続　サ未四已

「かは」「やは」　反語

「で」（「ないで」）　打消の接続助詞

「もがな」　願望の終助詞

語彙

まかる

あだなり

かこつ

おぼゆ

資料 9

『枕草子』「五月ばかりなどに山里に歩く」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を四〇字以内でまとめなさい。

2　「〇月ばかりなどに△△に歩く」という題名で短い文書を書きなさい。

「　　月ばかりなどに　　歩く」

『枕草子』「五月ばかりなどに山里に歩く」

内容

五月に山里に出歩くと、草原に見えない水がある様子や木々の様子に趣深さを感じる。

文法

同格の「の」

押しひしがれたりけるが→「れ」受身

語彙

歩く←→歩む

をかし

～わたる

つれなし

えならず

口惜し

資料　10

『枕草子』「ありがたきもの」

1年　　組　　番　氏名

1　内容を二十五字以内でまとめなさい。

2　「ありがたきもの」を自分でもかんがえてみよう。現代語でよい。

『枕草子』「ありがたきもの」

内容

世の中にはめったにないものがいろいろある。

文法

「る」「らる」　受身・尊敬・可能・自発　　接続

つゆ～打消／いささか～打消

をば

「じ」←→「む」

語彙

かたち

きず

用意す

心す

資料　１１

『検非違使忠明』

〇認められる所

京童部を殺そうとしなかった。

蔀の下戸を翼代わりに使おうとした機転の良いところ。

観音への信心をいつも忘れていない所。

とっさに判断して、蔀を持って飛び下りた所。

観音様を信じる清い心。

逃げようと谷へ飛び落ちるという勇気がある所。

蔀の扱いが上手い。

谷に降りようと思ったとき、蔀を脇に挟んだこと。

蔀のもとを有効に使って、頭が良い。

刀を抜いたが、京童部を殺そうとしなかったところ。

感謝の心を忘れない信心深さ（「自分が」ではなく）。

谷から落ちる度胸（ここまで来たなら殺された方がましでは？）。そこまでして生きるという強い意志。

大変な事態になっても信仰心を忘れなかったこと。

京童部とけんかをする前に観音様に助けを求めたこと。

京童部が迫ってきたときに、機転をきかせて、生きる方法を見つけたこと。

一歩間違えば死んでしまうような、決死の（&とっさの機転）パラグライダーもどき（？）を無事成功させた運動神経。

蔀を持ったこと。

危機的状況の中で観音への信仰心を忘れなかったこと。

頭を使って、蔀の抵抗を使って谷底に降り立った所。

〇認められない所

がさつ。

神聖なお寺を喧嘩の舞台に使っておいて神頼みだなんて罰当たりにも程がある。

検非違使だというのに（治安を維持しなくてはならないのに）京童部とけんかをしたこと。

忠明は相手を殺そうとしたこと。

いさかいをした所（わざわざ清水寺で）。

そもそも京童部とけんかをした点。

けんかしたところ。

検非違使ならば、京童部を前にして逃げるべきではなかった…誰か別の人を襲いに行くかも。

勝手に蔀の下半分を取った所。

観音様に助けられたことを良しとして自分の行動を反省していない。

蔀をとったら、そこに住んでいる人が困る。

本堂の蔀を勝手に取った所。

高低差があるところに逃げない方が良い（→うまくまけば良い）。

仏の力を過信しすぎてしまっている所。

蔀を勝手に取って落ちた。

勝手に蔀をつかったこと。

清水寺の設備（蔀）を勝手に奪って使った点。

観音様にお願いしていても飛び降りるという行為はあまりにも危険すぎると思う。

そもそも橋殿で喧嘩しなければよかったのでは……？

ハイリスクなのに飛び降りたこと。

資料　１２

「絵仏師良秀」

＊「批判的思考力」誰かの意見を批判的に捉え思考することではない。ある物事を様々な角度から考え吟味し、より良い答えを見出すために、論理的かつ合理的に行う思考のことである。

〇肯定→否定

・良秀は絵に一筋であり、身の周りに起きた不幸な出来事も良い事であると考えた。そして、結果として良秀の絵は認められたので、良秀の考えも良かったのではと思う。

→確かに彼は絵一筋だと思う。しかしそのせいで価値観の優先順位がずれてしまっていると思う、多分。

・目先の幸不幸にとらわれず、常に未来を見つめているからこそ、家の火事を仏の絵に生かそうと思えるのだろうと思うので、その考え方は見習いたいと感じた。少々性格に難はありそうだが、プロ意識と技術は素晴らしく格好いいと思う。

→自分の身に起きた不幸だけならば良いが家に置き去りにされた妻子を考えると、自分勝手に未来を見る良秀は立派とは思えない。絵仏師として仏様に関わる仕事の人なので技術だけでなく寛大で優しさのある精神も大切なのでは。

・家が既に燃えていて、普通だったらとても動揺してしまうが、良秀は火がどのように燃えるかわかり、自分にとっては利益であったと言っている。なので、良秀は一般的には不利益なことであっても、自分にとって利益があるように物事を考えられる。ポジティブな考えをできる人だと思った。

→家の燃えている様子を落ちついて見ていられるのは冷静だし、ピンチをチャンスととらえるポジティブな人だと考えられるが、正しい判断ではないと思う。利益より命を優先してほしい。

・自分の職業に誇りを持っている心構えが良いと思う。また、自分のことを顧みてしっかり反省できるのも立派だと思う。

→確かに、自分の職業に自信をもち、反省できていていいと思います。しかし、良秀の誇りや反省は、相手をけなす方向へと働いていたので、そこは好ましくないと思いました。

〇否定→肯定

・絵に対する姿勢は確かに良いかもしれないが、だからといって周りの人をばかにして良い理由にはならないと思う。家が焼けてしまい心配してくれてわざわざ家にまで来てくれた人をあそこまで無下にするのはやはり失礼である。また、家族についても今まで共に暮らし生活を支えてくれた妻や自分の血がつながっている子を気にもとめずまっ先に自分が逃げてしまうのは夫としてどうかと思う。

→家族を気にとめなかったのは夫として良くないが、絵師としては、その状況でも絵のことを考えていたことは絶賛されると思う。また、周りの人をあざ笑って無下にしたことは失礼だが、絵に対する自信があったことは良いと思う。

・家が燃えるのを見て中にいる人を助けようとしなかった。

→確かに中にいる人を助けようとしなかったことは正しい判断とは言いきれないが、燃えている様子を近くで見られるチャンス（技術を向上させるチャンス）を逃したくない、と考えることは、絵仏師としては仕方ないことではないのか。

・才能のためとはいえ、自分の妻子をもひきかえにするのは人としてどうかと思う。そんな人のかいた仏画を欲しいと思うのは仏様にも失礼だと考えたから。

→確かにそうだけど、実際の炎をみて上手くかこうとする向上心はすごいと思う。

・いくら職業といえども妻子の無事さえも確かめずに目の前の炎にばかり、気をとられてしまっているのは人としていかがなものかと思う。周りの人々は心配をして聞いてきたのに冷たい態度をとってあざ笑うのは印象が悪い。

→妻子の無事を確かめずに逃げたのは、ある意味で家族への信頼を感じるし、まわりの人へ、より良い利益について語っただけで、あざ笑いたかったわけではない可能性もあるのでこれらの行為は一概に悪いとは言えないと思う。

資料　１３

「大江山の歌」

久々だと心を躍らせながらたび（旅／足袋）の用意をする。
ポチはいぬ（犬／往ぬ)。
冬の朝　窓からきた（来た／北）風　凍えそう
夏が去り、屋外プールにも　あき（秋／飽き）が来る
昔より　カタカナ表現多くなり　いま（今／居間）はリビングルーム　という
満月に吠える、おおかみよ（狼よ／おお神よ）
夏休み　共に遊んだ　思い出を　うめ（梅／埋め）の木の下　タイムカプセル
ある日、漢字を書くと体が動かなくなった。なるほどかな（仮名／金）縛りか。
かまくら（鎌倉／雪洞）で寝る。なら（奈良／それなら）行こうか。きょう（今日／京）旅をする。彼は悲しいさが（佐賀／性）の人だ。
温泉ゆき（行き／雪）なし今年の冬
海に来たかい（甲斐／貝）があった。
塾帰り　友と歩いた　よるみち（寄る道／夜道）は　荷物は重く　心は弾む
楽し気な笑い声のきく（聞く／菊）クラス
おやつかい（親使い／お八つ買い）ディズニーランドの入園待機列の先頭をとって待つ。
新学期で気がはる（張る／春)。
科学は果てなきみち（道／未知）の旅である。

資料　１４

『徒然草』「丹波に出雲といふ所あり」

最後のひとこと

・子どものいたずらにしても、すばらしい立ち方でしたね……。
　→フォローに回るという考え方がおもしろかった。
・あんなに何も感じないのかとばかにしていたが、何もなかったではないか。
・あんなに涙ぐみ感動していたのにかわいそうだなあ。
　→私は上人のことをかわいそうだと思わなかったから新鮮。
・ただのいたずらも、子どもであれば、感動を与えるものですよ。
・なんだ。ただのいたずらじゃないか。
　→私も彼らの心情は呆れていると思う。意味があるのかと思っていたのにただのいたずらなのは呆れるだろうと思ったから。
・何にでも感動すればいいというものではない。
　→確かに、自分で理由を推測して、それに感動して泣くのは少し感性豊かすぎると思った。
・子どもが深い考えを持っていたずらをしたのかもしれないですよ。
　→なぐさめていて優しいと思いました。一つ目の場面の人々の心情は私と逆なので復習したいです。
・全てのものに深い意味があるわけではないですよ。
　→聖海上人を悟すようなひとことでおもしろい。
・しったかぶりの上人だなー。
・考えすぎでしたね。
　→私もここに同行してたらそう思っていた。
・せっかく土産話ができたのに残念だ。
・さすが、聖海上人さんは子供のいたずらにもありがたさを見出だすのですね。信心深いことだ。
・え……うそじゃん……
・人生生きていればこのような勘違いはいくつもありますよ。
・子どもの想像力はすばらしいものですね。
・自分の感じたこと、考えたことがいつも正しい訳ではない。勝手に勘違いして他の人に間違った知識を広めることは恥なので姿勢をこれから改めるべきだ。
・何か理由があると思って涙した感動を返してほしい。
・ドンマイ
・感激の涙は何だったのだろうか。
　→本当にその通りだと思った。真実を知って、とてもがっかりするだろうなと思った。
・上人さん、いろいろと想像しすぎだし、気付かなかった私らをばかにしたのはひどいよ。
・ただの子どものいたずらでした。ですが、何かの縁があって、神様はいたずらをしむけたのかもしれません。
・いたずらも時には奇想天外で意味の深いものに感じられるのですね。
・……お疲れ様です。
・何も知らずにえらそうなことは言うなよ。品位がない。
　→自分とはあきらかにちがい、こういう視点もあるのだと思った。

資料　１５

『徒然草』「ある人、弓を射ることを習ふに」

作者の主張（「人には怠け心がある」）に対する反論

・人に怠けることがあるのは確かだが、本当に修得したい、上達したいと思っていれば、怠けない。強く上を目指していれば、油断する暇はないからだ。

・確かに、人には怠ける心があると考える。しかし、本当に何かを学びたいと思う人は、怠ける心より学びたいと思う心が勝り、怠ける時間を惜しむと私は思う。

・すぐに行動する事も大切かもしれないが、今日出来なかった事をしっかり明日に続ける事も大事なのではないかと思う。

・今回の話はおそらく、弓の「練習」と修行の「学習」であるように、「できなければ大きなペナルティ」を受ける訳ではない。非常に緊迫した状況やしなければ何かが課せられるなどのケースではさすがにきちんと集中して行うのではないか。

・もし本当になまけ怠っていたのなら、その心はどんなに短い時間であっても自分でわかるはず。人にはなまけ心があるのは確かであるが、それをちゃんと認識しているならばその心に自分で気付かなければならない。

・自分自身のなまける心が分かっていない訳ではない。しかし、分かっていてもなお変えられないもの。

・自分が本当に真剣に取り組みたいと思っていることなら、何回チャンスがあっても師匠がいてもいなくてもいい加減にはならないのではないかと思う。

・たしかに人間には怠けてしまう習性があるけれど、怠けないように努力して毎日の習慣を確立している人もいるから、一概に全員に怠ける心があるとするのはよくない。

・確かに人には怠ける心があるが、それを自分でコントロールし、自律することができなければ、何事も上達、進歩しないのではないか。集中することが難しい理由は、自分自身の意志の問題だと思う。

・怠りの心を無くすのは確かに難しいが、常日頃から心掛けていないと無くすことができない。「今」は難しくでも「未来」のために「今」始めるべきである。

・行動する時、怠りの心を持っているのは、集中出来ていないことのあらわれであると私は思う。今していることに本気で取りくみ、真剣に行動しているならば、他のことを考えたり、怠りの心などわいてこないはずだ。

・作者は、「人は知らないうちに怠けて次に期待している」と主張する。しかし、万事にそれが言えるとは限らないと思う。自分が本当に達成・成功したいことは、先延ばしにしないで、目標に向かってすぐにし始めるものだ。

・今すべてのことを真剣にとり組む、という考えは分かるが、ときには後先のことを考え、全体的な見通しをつけてから計画的に行うことも必要なのではないか。

・私たちは物事に対して、今からある程度の期間に、なすべきことを計画することができる。また、計画をして、明日すべきことが分かっていれば、何とかして、今日の分を終わらせようとする。無計画では作者の主張もありうるが、計画する力があれば、起きないことである。

・私は、勉強しなきゃいけないと思いつつ、テレビを見てしまったり、ゲームをしてしまったり、本を読んでしまったりしているので、気付かない怠りの心があるというのは違うと思う。この心に気付いてもなお怠けてしまうことの方が問題ではないだろうか。

・すぐに行動するのは難しいかもしれないが、本当に急いでいるとき、時間に限りがあるとき、人は自分のできるかぎりの力を出そうとするのであろう。だから、すぐに行動にうつそうと思えば、うつせるのではないか。また、そのことが難しいと感じていても、くりかえすことで、すばやく行動できるようになるだろう。

・二本あるという安心感が一本目への集中力をさらに上げてくれることも考えられるので、必ずしも怠け心が生じるわけではない。

資料　１６

『徒然草』「九月二十日のころ」

登場する女性の行いを肯定する意見

・すぐに扉をしめずきらず、月を眺めている様子は客人に対して気持ちの良い行いであった。また、突然訪ねてきた客人を気分良くむかえ入れた行いからも、女性の優しさが見受けられる。

・日常的に相手がいなくても見送りができるというのはとても礼儀正しい姿である。相手がいない時にこそ、真の姿が見えると思うから。

・月は上を見上げないと見ることができない。そのため、この女性は毎日、月をながめていたのだと思う。美しいものやことに心をひかれる人の心もまた、美しく風情あるものである。すぐに戸を閉めなかったことも日々の相手への心がけであると思う。この女性はきっと、心がきれいであるのだろう。

・日ごろからお香をたくなど、最低限でも身の回りをきれいに保ち、夜に来客が来ても嫌な顔せず、月を楽しむ余裕があるから。この時に病気だったり、寿命が残り少ないと分かっていたかは謎だが、命が短くても人との会話や風景を楽しみ、優美な行動をする心の余裕は素晴らしいと思った。

・現代でも、家を出てすぐに鍵をかけられると、良い気分はしないものである。今は戸の穴から、来客の帰る様子を見て、鍵をかけるタイミングを見はからうことができるが、当時はそうもいかない。彼女は、すぐに掛け金をかけなかったことに加え、来客が去るのを見ていることを悟られないように、月を見るそぶりを見せている。そこまで気を遣えるのは、美しい心の有り方だ。

・夜、静かな時間に一人で月を眺めるのは、とても心が落ちつく。一日が終わり、一日を振り返りつつ次の日への英気を蓄えるためにも女性にとって必要な行為だったのではないか。

登場する女性の行いを否定する意見

・筆者は、隠れているのがばれていないと思っているが、普通は気付くものである。とすると女性は気付いていて見送る様をしているとも考えられ、わざとらしく月を眺めているのも良く思われたいあさましい行いといえる。

・この後、すぐに亡くなってしまうくらい体調が悪いのだとしたら、日頃の心遣いだとしても、休むべきだった。自分の体調に気を配るべきだった。

・人がのぞいているけど気づかないほど無防備なのはいかがなものか。人に命をねらわれてしまうような時代なのだから、もう少し警戒するべきだった。命をおとしたのも警戒心が薄かったことも関係しているのか。

・誰かに見られているからといって普段していない行いをしてよく見せようとするのではなく、ありのままを見せることで真の人間性が見れると思う。でも常日頃から心がけることは難しいことだし、何かしら裏表があってこその魅力というのもある。

資料　１７

『徒然草』「花は盛りに」　意見／反論

・花が散って来たころに詠むうたの方が、しみじみとして美しく感じられる気はするが、実際に肉眼で見てみたい、と思えるのは満開の花であり、満開の花には見る人を圧倒する迫力があるから。恋も終わりは切なく、興はない。

⇒満開の花は人を圧倒する迫力があるのだと思う。ただ、だからこそ満開ではないほうがいい。なぜなら、満開の花は人を圧倒してしまうため、それ以外の感情のひろがりがない。２度、３度と満開をみつづけると圧倒の感情はうすれてしまう。一方、毎日花をみるならば、時のうつろいを感じられる初め終わりが美しく、みればみるほどみりょくがます。

・確かに、物事が終わる様子や達成できないことも悪いことではないが、わざとそちらを好んで求めるのは違うと思ったから。残念なことに変わりはない。

⇒「残念なこと」はたしかにそうである。しかし、その残念さに、趣を見出すことができる人こそ本当に感受性のある人なのだろう。「残念なこと」それだけで終わらせるのではなく、そこに情趣を入れることで、より一層深く考えさせることが出来るものだ。「残念さ」を感じつつも、そこに一つの感情を含ませ、多くの人に風情を伝えるのも良いだろう。

・兼好の「花は盛りに」を読んだとき、その景色を思い浮かべることができて、盛りの前や後の雰囲気のよさを感じることができる。兼好は隠棲して静かな山にいてにぎやかな都とは異なる地に住んでいる。その環境が兼好に新しい物事の美しさに気づかせたのではないか。

⇒確かに本居宣長と違って兼好は隠棲をしていたからこの新しい感性をもつことが出来たのかもしれない。しかし、兼好の書いたものには、まるで盛りがきれいじゃないかのように書いてあるが、初めと終わりの美しさは盛りの美しさがあってこそのものなので、本当のみやびを理解していないように感じ取られる。

・私は、花は満開が、月は満月が最も美しいと思う。さらに、宣長の言うように、満月に雲を求めたりするのは、大多数の思いを逆行するものでありナンセンス。実際、私は散った後、花見したくないし、木の間から漏れる光で月見したくはない。

⇒大多数の人間が見出せないところに情緒を見出すのが兼好の考えの良さであり、「見所がない」と決めつけてこの情趣を理解しようとしないことこそナンセンスである。

・最初の文で兼好は「盛りのときだけが見頃か。いや、そうではない。」と言っているが、裏を返せば盛りも良いと認めている。確かに風情はあるが、わざわざ文章にして「自分は人と違う感性を持っている」アピールをするのは自分に酔っているし、鼻につく。私自身、満開の花のほうが好きなのも相まって、宣長を支持する。

⇒私は兼好を支持する。今回、このように文章にしたのは、多くの人が気づかない季節の美しさを文章化して、広めるためだと考える。自分の感性をひけらかすつもりはなく、ただひたすらに純粋な気持ちで、自分の見つけた美しさをしるしただけだ。確かに強調の表現が多く、押しつけられているように受け取る人も一定数いるだろうが、それだけ伝えたかったのだ。

・たしかに宣長のいう通り、花が満開に咲いていて、月がはっきり見える方が良いと思うのが人間の自然な心だが、散ってしまった花や雲にかくれた月にも待ちわびることも含め、趣があると考えられるのは素敵なことだと思う。

⇒最も盛っている時以外を「美しい」と思えるのは、あなたが盛りを経験してこなかったからでしょう。兼好のように質素でつつましい生活をしていれば、盛り以外も美しいと思わないと楽しみが無いのでしょうね。

・私は満開の花や明るい月を見てもただ「美しいな」としか思わないが、散っていく花や、雲に隠されていく月を見ると、美しいだけでなく、「儚い」「悲しい」というような、しみじみと共感する気持ちも生まれるから。

⇒満開の花や明るい月を見られるのは短い間だけだから、見た時にただ「美しい」と思うだけでなく、その特別さを楽しむべきだと思います。また、それを待ちわびるときならではの趣があります。

・花は風があるから、月は雲があるから、満開の時とそうでない時があったり、月がハッキリ見えない時がある。風で花がとばされたり、雲で月がおおわれるのは、ありのままの自然であり、それを美しいと思える兼好に賛成

する。
⇒ありのままの自然であっても、人間は完璧を望むものだから、満開で、月がはっきり見える方が美しいと感じる事が自然だと思う。
⇒人間は完璧を望むものというのが納得できない。完璧であったら、その後衰えることしか無いのだから自然のままにしたがい、完璧以外も風情があると捉える方が心に余裕がある。
・花の、盛りでない時ばかりを追い求めるのは違うと思う。盛りでない時も美しいという意見に賛同できるが、花が最も美しいとされる時期を見なくなることとは違うのではないだろうか。
⇒最も美しいとされる時期にわざわざ見に行くのは、周りの人々の動きに合わせている不粋な人だ。盛りだけでない花を様々な視点から美しいと思えるのが、本当に情緒を解する者だ。
⇒花を、盛りではあってもなくても、そこに美しさを見出せる人こそ情趣があるといえ、どちらかだけが美しいと限定する必要はない。
・確かに兼好が物事の終始は重要であるといいたい気持ちは分かる。しかし人々の中では満開の桜が印象として強く残っている。つまり無意識のうちに一番よい状態が、心に強く残っているため、一般の物事においては宣長の意見に賛同する。
⇒物事の一番良い状態に注目するのは当たり前のことであり、終始があって中心も成り立っている。よって、一見重要そうに思えない終始こそが物事の真の鍵なのであると考える。
⇒確かに終始の良さ、一番良い状態における良さは違うと思う。だから両者の意見があって当然であるが、宣長の言い方はやはり気に喰わない。互いに意見（考え方）を尊重すればよいのにと思う。様々な見方ができるようになったのにどちらかに絞るなんでもったいない。
・何でも100%の状態が一番いいに決まっているのに、わざわざ他のところに良さを見いだす必要がない。
⇒一番いい時でもその前後でもたくさん良いところを見出せる人はきっと人生幸せだと思います。
・確かに満開の桜や、雲がかかっていない月は美しい。しかし、例えば桜であれば、既に葉が出始め、地面に桜が散っている様子は違う意味でとてもきれいだ。
⇒頭の中ではそう思っていても、実際に外へ出て葉桜を見た時に、満開の時のように立ち止まって眺めることはしないだろう。
・一般的な意見を「まことのみやび」と言って「みやび」の中で区別をしているのはよくないと思う。兼好が風流だと感じたのならそれは兼好にとっての「まことのみやび」ということになると思う。
⇒兼好にとっての「まことのみやび」は兼好がわざと作ったみやびで、兼好も本当は一般的な意見がみやびだと思っているが、少し無理をして逆のことを言っているのではないかと私は感じた。
・数少ない美しい瞬間を楽しみにすることで、その瞬間をより楽しむことができるようになる。逆に常に美しいと思ってしまうと、大切な一回を見逃してしまったり、楽しむことに対するありがたみなどがうすれてしまうのではないか。
⇒常に周りに美しさを感じることができているのは素敵なことだと思う。一瞬よりも日々に美しさを見出せることで、また新しい気づきを得られ、人生がより楽しくなるだろう。
⇒その楽しさは、一番美しい一瞬の輝きを見たときの楽しさにはかなわないと思う。楽しい瞬間に少ないかもしれないが、その大きな楽しみは人生を充実させてくれると思う。
・花は満開の時、月は影が無い時だけ美しいわけではないという事に対して、そうは言っても昔から皆が関心を寄せているのは、やはり花は満開の時、月は満月であると書いてあるところに、共感したから。私も満開や満月の時の方が良いと思うから。
⇒確かに皆が関心を寄せているのは満開、満月かもしれない。でも日常生活を送る中にある生命の移り変わりに感動することはあるだろう。「特別」なことに心が動くだけで、「いつも」に動く心は真の感動だと思う。
・現代人特有の物質主義的思想に染まっているのか、私にはどうしても「満たされた物よりも、初めや終わりの寂しさや侘しさの方が趣深い」という思想が理解出来ない。盛りというものは一瞬、物々がほんの刹那に見せる表情の美しさにこそ、人々は惹かれるのでなる。

資料　18

『枕草子』「五月ばかりなどに山里に歩く」

・一月ばかりなどに祖父が家の庭に歩く。いとをかし。湿りし土の凍り、人などの歩むにさくさくと音を立てたる、いとをかし。池の水の薄く氷りしに、その下で鮮やかなる鯉のゆるく泳ぎたる、いとをかし。朝露にぬれ、松の葉輝きたるもをかし。

・一月ばかりなどに神社歩く。月も立ち、神社に参る、いとをかし。一年（ひとせ）の幸福を請ひ、みくじをひく。それを見て、家族の語らふ、いと和き気配なり。今年よのなかさわがしう、みくじあらざるやと思くば、いと口惜し。

・一月ばかりなどに近所に歩く、いとをかし。草木枯れていと寒きに人々のいとなく行き交ふを見るはものさびしけれど、またをかし。帰りざまに乾きたる空気に石焼き芋の歌聴くも又冬らし。

・二月ばかりなどに朝、学校く行かむと、家より学校に歩く、いとさむし。あたたかき着物を着、手顔などつめたくおぼくるいとをかし。

・如月ばかりなどに外歩く。さむすぎてわろし。そんなにさむいくらいならいつそ雪でも降ればよいのに降らず。たださむいばかり。これで暖冬ならば、普通の冬は冷蔵庫なり。北海道は冷凍庫なり。

・如月ばかりなどに近所に歩く。近所に雪の積もりたる、いとまれなり。赤き手で雪を集め、体ばかりある雪だるまをつくる幼子いとうつくし。今は便りなき友、亡き弟などと作り、手を取りて喜び、遠き日、思ゆ。

・三月ばかりなどに野原に歩く、いとをかし。空は晴れていと澄みわたりたるに、雲一つ二つありける、いとをかし。地を流るる小川の水も澄みわたり、いとすがすがし。数多の子どもたち、野原を駆けたり。子どもの声が聞こゆる野原でひとやすみするはなほよし。明るき春の陽差しは心をもあたたかくすなり。

・三月ばかりなどに家の近所歩く。まだ冷たい風吹きたり。されど、梅の花開くめり。梅の木にとまりたるめじろ花開くるを待つめり。

・四月ばかりなどに山辺に歩く、いとをかし。冬明け、日出でたりければ、道の雪が溶けたりながら、まばらに出でくる、いとをかし。

・五月ばかりなどに田んぼに歩く。気持ちの良い風がさあっと吹いて、水のはられたる田んぼの水面に波模様が見える、いとをかし。蛙とおたまじゃくし、いとうつくし。田植えの後に食べる柏もち、いとうまし。

・六月ばかりなどに街中に歩く、いとおもしろし。人々のさす傘、色とりどりなれば絵の具のごとし。ときに見られる江戸しぐさ、いとをかし。

・六月ばかりなどに海に歩く。太陽に照らされて水白く輝きたる、いとうつくし。砂浜を歩くに、あまた足跡つきたる、いとをかし。波、にわかにおしよせ、足ぬれたるこそ、いと口惜しけれ。

・八月ばかりなどに立川に歩く、いとをかし。昭和記念公園にある向日葵の地を覆ひ茂りたるはいとをかし。花の黄色く輝きたりけるが、丈の低きもいとうつくし。

・八月ばかりなどに祖母の家に歩く、いとをかし。庭の芝が青々と茂りて眩し。炉を囲み縁側に座して語り合はしたる、いとをかし。

・八月ばかりなどに街に歩く、いとをかし。空のいと青く見えたるに雲の白きが混じりていとをかし。たまに吹きたる風、心地良し。風鈴の音聞こえて夏を感じる。

・葉月ばかりなどに山道歩くこと、いとをかし。散りし紅葉の多くありける、いとをかし。遠くより聞こえける鹿の声もまた美し。山奥で団子など食べるも良し。

・葉月ばかりなるに故郷に歩く。久しく心知れる友の仕合はせなるを見て、いとうれし。昔の事言ふもいとたのし。

・九月ばかりなどに大キャンを歩く、いとむつかし。小さき虫の、たいそうあつまりてとびちるが、顔にかかるはいとむつかし。手をうちたたければ、虫どもの群れ二つに分かれるはいと清々し。

・九月ばかりなどに家の近所に歩く、いとをかし。夕暮れのころ、ベンチに座りて、涼しい風を感じること、いと幸せなり。秋の空を見るも良し。蚊に血を吸われ、痒みが出るは悪し。人々の行き交う様子、ことさら子どもの帰りを見るは、いとをかし。自然のうれしくなってくる。

・十月ばかりなどの池袋に歩く、いとをかし。中間試験の終わりたる、いと嬉し。年ごろよく比べつる人共に映画を見むとて池袋に歩く、いと楽し。　薄焼菓子（パンケーキ）食ふ、いとうまし。

・十月ばかりなどに池袋を歩くはいとをかし。ハロウインでうかれたその街並みを横目に一人アニメイトくと足をはこぶはいとつきづきし。けん騒を抜けた横道の静けさはいとをかし。裏路地の迷路のような空気もいとをかし。

・十月ばかりなどにお茶高に歩く。きんもくせいのにほひかをるもいとをかし。左右にあるいちやうの葉も、部活後に見る夕の空もいとつきづきし。

・十月の晦日に渋谷に歩く、いとをかし。怪しきもののけの姿ありて寄りて見るに、マスクなどしたる、いとをかし。二〇二〇風物詩なり。

・神無月ばかりなどに夜街に歩く、いとをかし。月も街灯もいと輝かしく見えわたりたるに、夜長を楽しみつつ、道行けば、日頃の道も常ならざる様なり。

・十一月ばかりなどの山歩く、いとをかし。日沈みし後に草上に寝ころびたるに、いと深き青に星あまた輝かしく見えわたりたる、いとをかし。ちらちら光りたる星、川の水面のごときなり。暁なりて、日出でにければ、紅葉の鮮やかに照らされたるもいとをかし。

・十一月ばかりなどに公園に歩く、いと美し。いちようの葉も銀杏も見えわたりけるはいとをかしけるが、つぶれた銀杏はいと臭し。

・十一月ばかりなどに洗足池を歩く。池のほとりをのんびりと歩く、いとをかし。冬も近くなりたるに、葉が赤や黄に染まりける。日が暮れ、夜が近くなりたるころに、その枯葉の水に浮かびたるを、鯉がつつくのいとをかし。

・十一月ばかりなどの雑踏に歩く、いとをかし。行きかう様々な人を観察したり、それらの人々の人生について思いをはせたりする、いとをかし。少しばかりこごえる中、マフラーに顔をうずめ、身体に寒さがしみこんでゆくを感じるもをかし。すれ違う人々の中に自分を見失い、立ち止まりて、己の人生、またアイデンテイテイーをぼんやりと考え、やがてたちもどるもあわれなり。

・十一月ばかりなどに公園に歩く、いとをかし。木々が紅葉たし、葉落ちたり、いとをかし。朝、冷たき風に吹かれ、ふと吐く息、白し。いとをかし。

・霜月ばかりなどに公園に歩く、いとをかし草葉のいと彩やかに色づき、はらはらと落つる様、いとをかし。時に、焼き芋など売られたるもをかし。

・霜月ばかりなどに蝦夷に歩く、いとをかし。辺りはいと寒し。雪降れりけり。ある人に誘はれ奉りて十勝に行きけり。畑つ物多くありけり。魚食ひてつまし。空見上げつつ故郷しのびけり。翌朝、土産持ちて、故郷へ帰りけり。

・十二月ばかりなどに町を歩く、いとをかし。雪がいと白く積もり、光のごとき輝きたるに人などが歩み、足跡が残る、いとをかし。父や子が店に楽しそうに入り、クリスマスプレゼントを選んでいるさまもいとをかし。

・十二月ばかりなどに横浜に一人歩く、いと心地良げなり。少し寒けれど、潮風に吹かるるとその寒きさく良し。されども、一人で歩かば、辺りにあまた女男ありて、いささか悲しがる。

・十二月ばかりなどにディズニーランドに歩く、いと楽し。ツリーも家もいと明ければ、心弾む。夜になりて、イルミネーションなどもをかし。手をつなぎて歩く男女の、いと幸せに見えける、ディズニーを訪れしカップルの別れやすさを知らん。そのこと教えはや。

・十二月ばかりなどに街に歩く、いとをかし。赤白緑の光散らつきたる木、いと映えり。赤きぼうしかぶりてすず鳴らすおじさんいと騒がし。

・師走ばかりなどに街中を歩く、いとをかし。そこここでクリスマスツリー立ち並むを見る、いとたのし。大きなれば、なほよし。部屋の中にあれば、なほよし。外は寒し。赤きオーナメント好む。

資料　１９

『枕草子』　　私家版「ありがたきもの」

・誰も失敗しないレシピ
・こぼれることのない醤油差し
・ごはんがくっつかないしゃもじ
・きれいに割れる割りばし
・黄味が二つ入っている卵
・減らそうと思えばすぐに減る体重
・取りやすいUFOキャッチャー
・漫画やアニメの実写化が、漫画・アニメ好きに好評なこと
・スムーズに起きられる冬の日の朝
・女子高の生徒が話す「理想の男性像」
・高校生になって身長が急激に伸びること
・弟が絵本の読み聞かせ一冊で寝ること
・サイゼリヤに行くお金持ち
・笑顔でないマクドナルドの店員
・たたかれない政治家
・サーファーで肌が白い人
・「行けたら行く」と言って本当に行く人
・思い立ったらすぐに行動できる人
・お年玉を「いらない」と断る人
・コロナが好きな人
・満員電車で自分の前の席に座っていて、駅で降りてくれる人
・怒らないからと言って本当に怒らない親
・兄弟を平等に扱う親
・親に怒られ、注意されることをありがたく思い感謝する子ども
・散歩が嫌いな犬
・最後まで丁寧に書くノート
・スカスカの通学カバン
・明日からテスト勉強すると言って、次の日から実行する人
・テスト勉強をしていないと言って本当にしていない人
・勉強しなくていいよと言ってくれる先生
・宿題を忘れた言い訳を信じる先生
・楽しい授業
・テストの後に勉強すること